
ジャンク・ダルク

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャンク・ダルク

【Nコード】

N2289B

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

ぼくっとなんとなく散歩することが趣味の少年、遠藤ルミナ。少年はある日、なんとなく散歩していたら謎の棺桶を発見する。その棺桶から出て来たのは、あの英雄として名高いジャンヌ・ダルクだった。天然ボケ気味のジャンヌに、変態丸出しの三十路おっさんことジャックマンに見た目が赤ん坊でジャンヌとジャックマンの兄であるジャン。そして振り回されつつもツツコミは宿命とばかりにする主人公ルミナ。パロディチックなコメディノベル、始めます！ 現在休載中。

第1話 棺桶からってどういづ見さ？

「ふあゝあ……」

ベッドから起きて早々、僕はあくびを一つする。

ポカポカした気温。それが僕があくびをする原因だ。

ちなみにポカポカとした気温だけど季節は冬だよ。念のため言つとくけど。

冬なのにポカポカした気温なのは、なんだかんだいって温暖化が原因なんだろうか？そこところはよくわかんないけど……。

……うゝん。なにか忘れているような気が……。

……………。

あッ！思い出したッ！！自己紹介だったッ！！

僕の名前は『遠藤^{えんどう}ルミナ』。ルミナって、だいぶ変わった名前だよね。

それだから案外他人に名前をすぐに覚えてもらえるのが地味ながらうれしいことだったりするんだよね。

趣味はぼゝつとすることと、なんとなく散歩すること。

高校一年で成績は並よりやや上、運動神経もそれぐらい。

うゝん……。運動神経や成績はともかくとして、趣味がどう考えても高校生っぽくない気がするなあゝ。改めてみると……。

「どっころしよつと」

ちよっぴり年寄りっぽい言葉とともに僕はベッドから起き上がって壁にかけている時計をしてみる。

午前十時……。昨日寝たのが午後九時だから十三時間寝たことになるね。うゝん、よく寝たなあ。寝すぎのような気もするけど……。僕はベッドから起き上がってからはパジャマから着替えたり、朝

ごはんを食べたり、歯磨きをしたり……そんなことをやっている
あつという間に午前十一時になっていたり。

え？学校はどうしたって？今日は土曜日だから学校はなしなんだ。
え？他の家族はって？……あゝ、それはねえ。……………。

実は、僕の父さんも母さんも外国で仕事をしているからここには
居ないんだよねえ。よって僕はマンションで一人で生活をしている
んだ。

あと、妹が一人いるけど僕とは通っている学校が違うし、なによ
り距離がすごく離れているので妹も僕と一緒に一人で生活をしてい
るのだ。

収入源は、父さんと母さんが1ヶ月に一度銀行にお金を振り込ん
でくれているので、それで生活をしているんだ。（ちなみに妹も同様
だからこの際省かせてもらいます）

さて、僕はすごく暇になった。

暇になったので早速僕の趣味の一つ、『なんとなく散歩』をする
ことにする。

なんとなく散歩とは、その名のとおりなんとなく散歩すること、
つまりぶらりぶらりとくに目的もないまま散歩することなのですッ
！！

……うわあゝ、僕ってすごい暇人だあゝ。

そして暇人の典型的な例と思われる僕は公園にやってくる。

公園には基本的な遊具はすべて置いてあつて、ちびっこたちの絶
好の遊び場になれるはずんだけど、どういうわけか子供の姿がな
い。

うゝん。……こりゃあれだね。たぶん家の中でゲームでもしてい

るのでしょうか。

そしてその公園の出入り口の反対側には林がある。

その林はよく秘密基地とかつくれたりするから、僕が小学生のころは結構友達とそれで遊び合ったりしたものだけどねえ。最近は時代の移り変わりのせいかな、ゲームで遊ぶ子供たちが増えた気がするよ。

……………よし。ここは一つ、童心に戻って林の中でも探索するか。

「……………」

林の中を探索するべく奥に入り続けて約五分。僕はとある物が視界内に入ってきたので歩むのをやめている。

その視界内に入ってきているものとは…………、ずばり

「か……………棺桶？」

そうとしか僕には考えられない。

ただ、造りがなんだか非常に高級感あふれる…………おそらく檜とかなんか高級な木材を使用している、四角の中に人が一人入れそうな物体。

ま、まさか…………死体遺棄！？大事件の予感！？？僕にあらぬ嫌疑がかかりまくりそう！？？そして僕は牢屋行き決定！？？？将来真っ暗にいい！？？？？

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……………。

落ち着け、ルミナ。中に人が入っているか、まだ確認していない

じゃないか。

自分にそう言い聞かせる僕だけど、僕の心臓はバクンバクン、まるで初恋の人に告白するときみたいに……っというか僕まだ初恋の人すらいなからよくわかんないけどさぁッ！

とにかくそれっぽいのでその表現で勘弁してよッ、みなさんッ！少し震える手で僕は棺桶を開けてみる。

するとそこには、長い金髪を三つ編みにして、服装はなぜか鎧を着ている女性がいましたとさ。
めでたしめでたし。

「……って、全然めでたくありませんてえええええッッ！！！」

うわああああッッ！！！！僕はどうしたらいいんだッ！！！！

なんか西洋風の鎧を着た女性が棺桶の中で健やかに永眠してますよ！！マジでッ！！本気と書いてマジでッ！！

自分でも爽やか過ぎるくらいな混乱っぷりだよッ！！だいたい混乱しているのに爽やかって何なのさッ！！

「ううーん……」

……！！！！なんかしゃべりましたか！？これって喜んで良いんですか！？？ゾンビが復活したなんてオチだったら一生無差別に人を恨みますよッ！？？？

……念のため僕は彼女の白磁のように透き通った華奢な腕を取り、脈があるかどうか確かめる。

……。

……。

.....。

.....ほっ。よかったあ。生きてるよ。
生きてるのは良いとして.....。

「この人どうしよう.....」

第1話 棺桶からってどういづ見さ？（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第2話 ジャンヌさん、人の名前間違えないで下さい

えー、どうも遠藤ルミナです。

僕は今ですね、たいへんなことに巻き込まれた気がしてなりません。

公園の林の中で偶然見つけた謎の檜で造られた棺桶。そしてその棺桶の中になぜか鎧を着た三つ編みの金髪の女性が寝ていたのですよ、はい。

それでそれからどうしたって？……………。

さすがにほうっておくのもどうか？って思ったからその人をちゃんと僕のマンションまで運んできたよ。

運ぶときやたらと周囲の人の目が痛かったけどさ…………。

それにさあ、女性にこんなこといってなんだけど…………すごい重かったよ、本当に。

原因はたぶん鎧なんだろうけどさあ。

まあそれで、とりあえずその女性は僕のベッドで寝かせているんだけど…………なんかミシミシいってるよ。女性じゃなくて僕のマイベツドが。

まああの鎧、見た目以上に重いから仕方ないとはいえ…………こままぶつつぶれるなんて事は…………ないよねえ？…………うん。ないない…………だれかないと言ってください。

「　　ないよ」

「えー！？」

……………い、今、なんか女性がしゃべったんですけどー！
しかも「ない」って…………もしかしてさっき僕の「ベッドが鎧の重みで壊れないか否か」という質問に対しての答えなの！？

「……だからピエール……。ハンバーガーはペットの子犬のジョニーにやっただけじゃない……」

は？

もしかして……寝言？

それにピールとか誰？しかも子犬にハンバーガーとかやっていの！？ピクルスが確かハンバーガーに入ってるはずだからやっちゃいけないと思うんですけど。

なんかけっこうさっきの寝言の中にツツコミをするべき点がいくつもあつた気がするのには僕だけ？

「……あ、間違えた。チルドレンジャーがジョニーをさらってたんだった。……とするとハンバーガーは妹のカトリーヌが食べたんだよ、きつと」

チルドレンジャーってどなたですかあ！？しかもペットさらって
るのかよ！！

「いったいこの人はどんな夢見てるんだか、僕的にすごく気になるよ……！」

「うん」

あ、寝言が治まった。やれやれ、僕も休憩しよう。

何の休憩かって？それはツツコミの休憩だよ。思ったより労力使
うんだよねえ、ツツコミって。

……うん。こうして見るとこの人。歳は対して僕と変わらないのかもしれないなあ。

身長はだいたい僕は百六十五センチほどだけど、この人はそれ以下のだいたい百六十センチくらいだし、容姿も若々しいし……。

ただ、鎧を着ているのはなぜ？

そこを僕はこの女性が起きたときまず第一に問いたいと思ってるよ。

そんなとき、

「……………」

「へ……………」

小さな唸り声を上げてその人はゆっくりと目を開ける。

蒼い蒼い、聡明な蒼い瞳だった。

その目と僕の目がぴったりと合う。

「……………」

「……………」

……停止。それは彼女も同じように目をまあるくして呆然としている。

そして、

「きゃあああああああああああああああああああああ
あ……………」

バツチイイイイイイイイイン……

乾いた弾けた音が、僕の部屋中に響いた。

「……………まあ、無事でよかったよ」

あれから僕はこの娘にしばらく頬をビシビシバシと、そりゃあ格闘ゲームでいうんなら軽く五十ヒットくらいは出せてたよ、あれは。

おかげで僕の頬はパンパンに赤く痛々しく腫れ上がって、今は氷で冷やしているんだ。

女の子も僕をさんざんひっぱたいてから正気に戻って、今は自分の行いに反省しているんだろうか、やや僕に顔をうつ伏せたままベツドに腰掛けている。

……まあ、ベッドがミシミシいつているのはこの際目をつぶろう、うん。

「……あ、あの～。大丈夫ですか？お顔は。私がしてなんですけど……」

「え？あ～…うん。大丈夫。こう見えて打たれ強いから」

でも顔をひっぱたかれたのは初めてだったなあ～。初体験の痛みには、僕はけっこう堪えていたりする。

「それよりさ。一つ君に聞きたいことがあるんだけど」
「なんですか？」

おおッ、素直に受け答えしてくれそうッ。よかったあ～。

「何で鎧姿なの？」

「それは……戦争をしていたからです」

「へえ～……」

へえ～、そつかあ～。戦争かあ～。

銃弾が入り交じって、騎馬隊が敵陣に特攻して、血しぶきと敵味

方の断末魔が飛びかう戦争があゝ……。

………つて、はい？

「あ、…あの戦争つて？」

「………？戦争は戦争ですけど」

いや、そんなさも当然そうな顔で言われてもさあ。戦争なんて僕に言われても……。しかもこのご時世^{じせい}に鎧を着ての戦争なんてあるの？

「……質問するけど、君の名前は？」

「私ですか？ 私はジャンヌ・ダルクと言います。ジャンヌと呼んでください」

ジ、ジャンヌ・ダルクだつてえ！？

あのオルレ안의乙女といわれて、フランスの国民的英雄でカトリック教会の聖女の！？？

いやいやいや、落ち着け自分ッ！！

たまたま同姓同名なだけかもしれないじゃないか。

そうだ。この世界中探せばジャンヌ・ダルクという名前が十人に七人いるって隣の山田君が言ってた気がするし。そもそも僕の隣の家にも学校の隣の席にも友達にも山田なんて姓のいないけど。

「………あ、あのゝ。出身国は？」

「フランスですよ」

ああ、一致した。

………あ、今思えばこの女の子が寝言で言ってたピエルとかカトリ又つて、ジャンヌ・ダルクの兄と妹だったような……。

他には確か……ジャックマンとジャンっていう兄がいて……それ

くらいしか知らないけど。

「どうしましたか？……えーっと、確か……ベンジャミンさん」

「いやいやいやッ！！僕はベンジャミンって名前じゃありませんからッ！！そもそも僕はまだ君に名乗ってないからッ！！」

「あれ？そうでしたっけ？」

「そうですよッ！！」

ふうー、危ない危ない。

危つく僕の名前がこの人の中でベンジャミンになってしまうところだったよ。

そもそもどこからそんな発想が出てくるんだろ。

この人についてもしかしてボケキャラ？

まあとりあえず自己紹介しなきゃ……。

「僕は遠藤ルミナ。決してベンジャミンじゃないからね。……重要ッ！」

念のため僕は強調する。

「はい。わかりました、ベンジャミンさん」

「はい。全然わかってないよね、ジャンヌ」

「はい。全然わかってます」

「はい。全然わかってないといいなさい」

「はい。全然わかってません」

……………。

少し腹が立ったので僕はジャンヌの頭をボコツと殴る。

ジャンヌはなんかすごく痛そうに自分の頭をさすっている。

まあそれは当然だと思う。だって痛いように殴ったんだから。

僕は実のところ男でも女でも容赦しない主義だからね。
それで、僕は再度ジャンヌに聞いてみる。

「僕の名前は？」

「ベン……もといルミナさんです」

よかったかったあ。

まだ少しベンジャミンといいそうになってたけどそれはおいってお
こう、うん。

まあそんなことより、

「……ジャンヌって、フランスから来たんだよね？」

「はい。そうですけど」

「……どうやってきたの？」

「タイムマシンです」

……………こほん。

なにかさつき、ものすごくSFチックな単語が出てきた気が……。

「タ、タイムマシンって？」

「ルミナさんが私を見つけたところにあつたはずですけど……」

見つけたところにあつたって……あつたのは棺桶だけですけど。

もしかして……もしかして……

「もしかしてさあ。そのタイムマシンって棺桶型じゃない？」

「はい。そうですよ」

やっぱりそうかッ！……っていつかデザインもつとマシなのなかったのかよッ！！

棺桶つていいイメ ジなさ過ぎだぞッ！！

「なんてそんなタイムマシンに乗ってきたの？」

「さあ？それは私も知りません。ただ、私の最後の記憶では戦場でうつかり居眠りしていたらいつの間にか乗っていてこの時代まで来たのですが……」

それってつまり死んだとみなされたからじゃないんですかあ！？？
そして本物の棺桶と間違つてあの棺桶型のタイムマシンで現世にやってきたんじゃないやあ……。

「でもおかしいですねえ。あのタイムマシンって確かまだ未完成だつてジャンがいつてたはずなのに……」

「…ねえ。どのへんが未完成なの？」

「たしか……性格がどうのこうのとかいってたような……」

「性格って……もしかして性格が変わるとか？」

「はい。…でも、私の性格は全然変わってないみたいですけどね。」

つまりは無事に別の時代にやって来れたというわけですね」

「へえ」

まあ、それはそれでよかったといえはよかったんだけど……。

心なしか、さっきからベッドのミシミシ音が酷くなっているような……。

「……ルミナさん。先ほどから聞こえている変な音は何なのですか？」

ジャンヌもなんか気づいてる。……ってことは気のせいじゃない。
……。

バキッ

「「あ……………」」

僕とジャンヌの声が重なった。

なぜかって？それはさつきからずっとミシミシいったマイベッドがご臨終になったからです。

ああ、かわいそうに……。

てえええええッッ！！ちょっとまってくれってえッ！！！！
僕のベッドが壊れちゃったよッ！！！！マジでッ！！！！

「……………あら？薪が真^{まき}つ二つになりましたね」

薪ですって！？僕のベッドを薪呼ばわりですか！？？

酷いわよッ、ジャンヌッ！！あなたからは血の臭いがするわッ！！

……………ふう。思わずキャラが変わっちゃったよ。ショック過ぎてさ。

「……………ジャンヌ。一つ聞きたいことがあるんだけどさ。住む場所と
がある？」

僕はそんな質問をジャンヌにしてみる。

全部を全部信じれるわけではないけど、この娘はたぶん今のところ住む場所はないだろうと思ったからだ。

まあこれで「ありません」とかいつてきたら「じゃあしばらくここにいていいよ」みたいにいつてもいいかなあゝ、とか思ってたわけだけど…………

「ちゃんとありますよ。これからあなたの家に強制的に住ませても
らいますので」

……なんだろう。ものすごくこいつを出ていかせてやりたくな
た。

「それではしばらくの間、よろしく願いしますね。ルミナさん」

……はあ。なんかすでに勝手に決め込んでるし……。

これから僕はどくなるんでしょうかねえ。すごく不安だよ。

第2話 ジャンヌさん、人の名前間違えないで下さい（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第3話　グッバイ、僕のベッド。ジャンヌ曰く薪よ

「起きてくださーい。ルミナさん」

「……うう……。……なんだろ。なんか僕の耳に女性の声が聞こえる気がするよ……。」

「なんだか清らかで、聡明な感じの……。美声って、僕の耳に入ってきているこっという声のことをいうのかな？」

「起きてくださいってばッ。ルミナさん」

「うう……。でも……。なんだ……。」

「僕はすごく眠たいんだって。おまけに今の季節は冬だからなおさらだよ……。」

「あったかいふかふかの布団にずっと包まくるるときたいって、ホントに。」

「起きてくださいよッ、ルミナさん」

「うう……。ホントに寝かせてくれ……。」

「眠いんだからさあ……。」

「朝ですよ」

「……朝だね。少なくとも、夜じゃないよね」
「そうですね」

「朝は寝る時間帯だから僕は寝るよ……」
「起きる時間帯の間違いですよ、それ」
「……」

……。あゝ。適当に声をあしらおうとしたんだけど無理みたい。

……。アレ？

なんか僕、ナチュラルに会話してたけど……。誰と話してるんだろ？
僕は一人暮らしをしてるし、妹が時々勝手に合鍵で僕の部屋に入
ってくるけど、どう考えてもさつきから聞こえている声は妹の声じ
やないし……。

……………。

気になったので僕は重いまぶたをゆっくりと開ける。

「あ、起きましたね。ルミナさん」

金髪の長い髪を三つ編みにしている女の子が、僕の顔を覗き込ん
でいた。

「どうしたんですか？キョトンとしていますけど」

「……………誰？」

僕のそんな声を聞くと、なんだかその女の子はガガガアアアア
アンツッ！みたいな表情に早代わり。

いやあゝ、だって知らないし。それに眠たくてなんか脳みそがう
まく機能してないからなあゝ。

「覚えてないんですか？ルミナさん。ジャンヌです。ジャンヌ・ダ
ルクです」

「へ？…………ジャンク・ダルク？」

「違いますッ！！私は決してくずやがらくたではありませんッ！！

……………今のところは」

今のところ！？？ってことはいつか壊れてくずやがらくたになるっ
てことですか！？？

思わず僕は上半身をベッド……ってあれ？ベッドじゃないし。
なんか普通に床に布団が敷かれてるんですけど……。

……あ。なんか思い出せそう。

何を思い出すって？そりゃあ僕の隣で僕をまじまじと動物園にいる動物を見ているような視線で見ているジャンク・ダルクのことだよ。

あれ？ジャンクソン・ダルマだっけ？……まあいいや。
とにかく僕は考える。

……。

……。

……。

……あッ！そうだッ！！思い出したッ！！！！

「君の名前はたしか……カラス天狗ッ！！」

「ジャンヌ・ダルクですッ！！」

「……あれ？そうだったっけ？」

「そうですよ。さっきも言った気がしますけど」

うーん。少し惜しかったなあ。

カラス天狗とジャンヌ・ダルク。……うーん。惜しいね。気分的に。

「全然惜しくないですよ。ルミナさん」

「そうかな？僕はけっこういい線ついたとおも……ごめん。僕が悪かったよ」

なんかジャンヌの表情がどんどん鬼の形相へと変貌しかけていたので僕はとにかく誤る。

……っていうか、なんかさっき心の中をよまれたのは気のせいかな？

「全くもって気のせいですよ。ルミナさん」
「……」

……うん。
全くもって気のせいじゃないみたいだ。……まあそれは今はおい
といて、

「……ベッド。直さないといけないな」

僕は真ん中から真つ二つに割れたベッドをみてそんなことを言う。
だって、これがないとなんか落ち着かないというか……。

「へえ。ベッドっていうんですか。それ」

「うん。決して薪じゃないから。これ重要ッ！……って、ジャンヌ。
君ってベッドの存在知らなかったの？」

「はい」

うん……。これはけっこう何も知らなさそうだぞ。

まあ無理もないかもしれないけどさ。ジャンヌが生きてた時代に
そもそもベッドなんかあったかどうか定かじゃないし、ましてや
テレビとかなんて知ってるわけないよね。この感じじゃ……。

「まあとにかく。これからベッドを直すか」

「どうやって直すんですか？」

「……」

う……。痛いところをつきなさるね、このお嬢さんは。
実は何も考えちゃいないんだよね……。

っていうか壊したのはこの人なんだから直すのは僕じゃなくてこ
の人だろ……。しかも薪呼ばわりするし。

「……」

僕は意を決して壊れたベッドを捨てることにした。

だって大工用具ないし、そもそも修理のやり方なんて知らないし勢い込んで言っただけだし……。

僕の部屋の隅っこがちょっぴりさびしくなりました。
おもわず体育座りで落ち込みたいくらいに……。

「随分きれいになりましたね、ルミナさん」

きれい……、その言葉にはちょっとばかり語弊があるのは僕の気のせいかな？

きれいじゃなくてさびしくなっちゃいましたよ。殺伐としてますよ。

ただでさえ僕の部屋には何もないんだからベッドまで消えちゃったら寂しさ全開だよ。真夜中の墓場までとはいわないけどさ。

……ん、墓場？

「……ジャンヌ。君の棺桶型タイムマシンは回収したの？」

「いえ。回収してませんけど。面倒臭いですし」

……ちよつと。まずいんじゃないやありません？

棺桶を放置だよ？しかも人気のない林の中で。

何か事件が起きたと思われても不思議じゃないんじゃないや……。いや、

この時代にジャンヌ・ダルクが来ていること事態、ノストラダムスもびっくりの大事件っぷりなんだけど。

しかもその棺桶はタイムマシンだよ？そんなオーバー・テクノロジーなものが放置されてたらまずすぎるでしょ！

「ねえ。ジャンヌが乗ってきたタイムマシンって、起動するの？」

「さあ。知りませんが、でもおそらく50％の確率で動くと思いますよ」

微妙すぎるけど半分切ってるじゃないッ!! 動く確率ッ!!

せめてここは確率は五分五分というべきでしょう!?

僕はすたすたと玄関まで無言で動く。

「あれ？どこいくんですか？」

「棺桶を回収しにいつてくるよ。つていうかさあ、君も手伝え」

「**なんでですか？**」

……なんだろう。ものすごくこいつをぶん殴ってやりたくなってきた。

「君の持ち物だろ。持ち主がちゃんと回収しないと」

「ですけど、こんな明るい時間に取りに行くんですか？」

はッ！！そうだったッ！！

普通に落としたリュックとか拾いにいくのはまだしも、今回拾う……
 ……というか持ち運ぶのは棺桶。しかもタイムマシン。

昼間にどうと棺桶を担ぐ自分。それを指差して井戸端会議でおばちゃんたちが会話に花咲かせる……。

そして僕は変人扱い……。

「……」

僕は夜に回収することにした。
さすがに変人扱いされるのは嫌だし。

第3話　グッバイ、僕のベッド。ジャンヌ曰く薪よ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第4話 夜中に棺桶を担いで歩く人ってすごく傍から見たらおかしいよね？

ふあゝ……。眠い……。

なんだかんだであれから夜になりました。しかも夜中の10時。
普段の僕ならすでに寝ている時間帯。なのに……。

「どうしました？私の顔を見て」

「いや。別に……」

この人のせいで寝ることができない。

うう……。夜風が寒い。羽毛布団が恋しすぎるよ。
今だけ。

今だけでいいから、ゴリラやチンパンジ みたいに全身に毛が欲しい。人間は進化してる生き物っていうけど、本当にそうなのかなあってついついこの寒い中思ってしまうよ。

普通進化しているのならさあ、もっとこう……毛を自由に生やしたり抜いたりできないものかなあ……。

人間が体毛を自由に伸び生やしたり抜き落としたりするところ……。

……。

……。

……。

「あれ？どうしたんですか、ルミナさん。急に顔色が悪くなつたような」

「い、いやあ……。気のせいだよ気のせい」

ふう。思わず想像しちゃったよ。

やっぱり人間は今のままが一番ってことかな。

「……ねえ、ジャンヌ」

「はい。なんででしょうか？」

「ジャンヌがタイムマシンで僕たちの時代に来ちゃってるわけだけど、家族の人たちとか心配してるんじゃないの？」

「たしかに、『大変だ大変だ』みたいにはなっているとは思いますが、3日で問題なくなると思いますよ」

「……いいのか？それで。」

「ジャンヌもなんかさも当たり前みたいに言ってるし……いいんだろうね、うん。」

「……さてと、これから運ぶわけだけど」

「なるべく人目につかないようにしないといいけませんね」

「うん」

幸い、誰も棺桶には気づいていなかったようで大事件になっている様子はないし、ちゃんともののまんまで残っている。いやあ、よかったよかった。

そして、僕とジャンヌが棺桶を2人で持ち上げようとする。

「……あれ？棺桶って、こんなに重たいものなの？」

「さ、さあ……？私、棺桶なんて持ったことないんでわかりませんが」

なんか中にまだ入ってるような重さ……。

だけど、僕が一度開いて見たけどどう考えても人一人くらいしか入れない大きさだったし……気のせいだよな、うん。

僕はそんなことを思いながらジャン又と一緒に棺桶型タイムマシンを運ぶことにした。

うん。僕は一つ気づいたことがあるんだ。

それは……、なんと……、夜中に棺桶を運んでいる人程、怪しい人たちはいないってことに。

考えようによつては何か犯罪でもしてきたのか？犯罪でもしているのか？って感じに客観的に見えなくてもない。

ああ。誰にも見られたくないなあ。ホントに。

「おいッ！おまえたち何しているんだ！？」

って思っていたところから出会っちゃったよおおおおッッ！！！！！！

しかも警察ッ！！まずいますいますいますいますいます
まずいますいますいっつつつつつつつつてえええ
ええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええ

「あ、あああああ。えつとですね。」

「タイムマシンを運んでたんですよ」

うおおおおおおいッッッ！！！！そんなSFチックで
オバテクノロジックな単語をやたらと口に出さないでよッッ！

！……！

なんか警察官も「何言つてんだ、こいつ」みたいな目でこちらを見てるしッ……！

「……話は署で聞こう」

うわああああああああああッッッ……！！！！マジですかッ……！！？

怖くてごつい顔つきで僕たちにじりじりと迫ってくる警察官。

ああ……もう刑務所行きだああ……。

っとそんなとき、

《ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ》

なんだかとおつても不気味で悪役的な含み笑いが聞こえ始める。

しかもその声。発信源はどうやら棺桶の中からだッ……！

うわぁ……。なんかとんでもないものを現世へ来させてしまったのでは？

《1つッ！鎧はすべて海パンにッ……！

……つていたぁッ……！！

……！！》

僕は驚いて担いでいた棺桶を警察官目掛けて投げ捨てる。

だってオッサン声が耳元で聞こえてきてたんだよッ……！嫌だッ……！

ッ……！オッサンには悪いけどさぁッ……！

しかもその棺桶に入っているオッサンと思われる人物は頭でもぶつけたのか先ほどから「う……う……」うなってる。

「そ、その声は……ッ……！！」

うおッ！？なんかジャンヌが自分は知ってます的な感じに言うてるッ！！

もしかしてジャンヌの知り合いッ！？知り合いにしても悪趣味な……。

なんか「鎧はすべて海パンに」っとか叫んでいたし……。

《ふっふっふっふ……。久しぶりだな、ジャンヌ。っと言って
も一日しか経ってないけど》

警察官を下敷きにいる棺桶から、突然シュウウウウウウ
……と、白い煙が噴き出してきたッ！！

うわぁ……。そんな機能あつたの？実に不必要な機能だなぁ。
棺桶からのっそりと出てきた人物は、白髪の本サボサ頭で眼鏡を
かけ、白い白衣を着て……。まぁ、この辺はまだまだ許せる範囲。

……。けど。……。だけどさぁ。

なんで下は海パン一丁なのさッ！！

「やっぱりジャックマンじゃないですかッ！！」

「ふふふ、久しぶりだな。ジャンヌよ」

なんか勇ましい戦士のような口調のジャックマンとかいう人。

勇ましいしゃべり方だけど……その格好じゃなぁ。ギャグとしか思
えないよ。

しかもジャンヌはジャックマンの海パン姿にはノ タッチだし。
もしかして、いつもこんな格好してるのかなぁ、この人。

とにかくにも、僕はなんだかとてもない人に出会ってしまった
のでした。

……だれか、僕と代わりませんか？

第4話 夜中に棺桶を担いで歩く人ってすつこく傍から見たらおかしいよね？

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。

(月1回)

ネット小説ランキング>現代F Tコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第5話 シチュレ ションってやっぱり大事だと思うよ

「ルミナさん、起きてください。朝ですよ」

「……」

……うう。朝、か。起きないといけないな。

眠たくて、頭が未だにぼーっとしているけど、今日は平日。学校もあるので僕は起きることにする。

……うう。寒ッ。ジャンヌ、僕より早く起きてるんだからストブつけといて欲しいよ。

いや、ダメだな、やっぱり。よくよく考えてみるとジャンヌはベッドの存在すら知らないんだからストブの存在も知らないんだろっなあ。

「……？どうしました？ルミナさん」

「いや……。なんでもな」

そう言いかけたとき、僕の視界にあるものが入り込んでくる。棺桶。それも、ベッドがなくなっただけにちょうど陣取っている。

はつきりいつて、嫌だなあ。不吉極まりないよ、まったく……。あれ？そういえば、

「ジャンヌ、あの……なんだっけ？あれだよ。あれ。……そうそう、ジャックマンって人はどこいったのさ？」

「ジャックマン？……ああ、兄さんのことですね。兄さんなら」

そう言いながらジャンヌはスタスタと棺桶のところまで移動して、棺桶をパカッと開ける。

そして、

「いじくも」

⌈
^
?
⌋

僕は布団からいよいよやながら出て、棺桶の中を覗いて見る。と、

[illegible]

「ど、どうしたんですか？そんなに大声を出して……」

「だだだだだだっ てさあッ！！」

だってツー！その棺桶の中にはおっさん、もといジャックマンがツー！ジャックマンさんがなんか某毒リンゴを食べて眠ってしまつたお姫様チックに寝てるんだよツ？

しかも服装は裸の上に白衣を着て、しかも下半身はなぜか海パン
丁ッ！！

おまけにおっさん……なんでタコ唇になってんのさッ！！まるで思春期の子供が誰か異性のキスを心待ちにしてるように頬も心なしに赤いしッ！！！！

寝言でおっさんが「うう……。キスして……。キスしてえ……。別れる前にキスしてえ」とか言ってるしッ!!

いろいろな意味ですさまじいですよッ！！マジでッ！！！！！！！！

「兄さんは今まで30年生きてきて告白した回数1717回のうちふられた回数が1717回ですから、おそらく夢の中でも……」

1717回も告白する暇があるなんて……暇ですね、君のお兄さん。は。

「いいんですよッ！！コメディなんですからッ！！」

意味わからないッ！！っていうか心読まれたッ！！

「さあ、ルミナさんッ！！レッツゴ ですッ！！男と男のキスをッ！！」

「いやッ！！っていうか兄と妹のキスシンがアウトなら男と男のキスシンもアウトだろッ！！」

「いいんですよッ！！この作者のことですからなんとか誤魔化してくれるはずですよッ！！理科の化学反応の一例とかでッ！！」

ぜんっぜん例になつてないだろッ！！

「それとか『日本の伝統はモザイクです』とか言つてルミナさんが誤魔化して下さいッ！！」

無理だろッ！！絶対ッ！！

だいたいモザイクに伝統なんてないってッ！！

「さあッ！！ルミナさんッ！！これから兄さんを起こす度にしないといけないんですからまずはその第一歩だと思つてして下さいッ！！」

「そんな第一歩は踏みたくないってッ！！」

そうこうしているうちにどんどんどんどんジャンヌに背を押されて僕とおっさんのくちび……いやいやいやッ！！こんな描写したらここで小説が打ち切られてしまつてッ！！

ああ……と、とにかくッ！！僕は最大すぎる貞操の危機がせまっている身でございまして……ッ！！ああ……ああ……ち、近づくッ

！！近づくツ！！近づいてくるつてえええええツツ！！！！！！
 やめてえええええツツ！！！！もつ止めてくれえええええええ
 えツツ！！！！

なんですかぁッ！！僕は何か悪いことしましたかぁッ！？？
連載始まってから僕は何もまだたいして悪いことをしてない気がするんですけどッ！！

ああッ！！来るッ！！来るってえええええッッ！！！！！！！！！！

ブチユウウウウウウウウウ
.....

日本の伝統はモザイクですッ！！

第5話 シチュレ ションってやっぱり大事だと思うよ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第6話 小さいころよく逆さまに穿いちゃうアレ

ふう〜。今日も暇な授業だったなあ〜。

……あッ！そうそうッ！！ただいま僕は学校から家に帰宅中なんだ。

え？学校での出来事はって？それは……あれだよ。学校では特に話す内容というものがなかったんでカットしたんだ。

う〜ん。我ながらなんて自分勝手さ。思わず自分に惚れ惚れしちゃうよ。……誤解がないようにいつとくけど、「自分に惚れ惚れ」って言ってたけど僕はナルシストじゃないから。ただ単にノリでいっただけだから。これ、重要ッ！（念のため「！」マークをつけとくから）

かわりばえしない帰宅道をひとりで歩いて、ようやく我が家に到着。そして鍵を開けて中に入ると、

「どうだッ！？ジャンヌよッ！！今の余は最高にセクスイーではないかッ！？？」

「兄さんッ！！こんなところをルミナさんに見たら怪しさ濃縮還元100%ですよッ！！」

「大丈夫だッ！！この余のセクスイーっぽさで、朝余にモーニングキスしてくれたルミナ殿も許してくれてかつ、喜んでくれるはずだッ！！」

……………。

僕は扉を開けて中の様子を見たまま動けません。フリーズ状態です。

いや、なんでって聞かれても……困るよ、僕。

「おおッ！！ルミナ殿ッ、帰ってきたのかッ！！どうだッ！！

余のセクスイーっぱさは??セクスイー度数1000だろ?」

今僕に話しかけてきたのはジャンヌの兄のジャックマン。

僕がそいつに返す言葉は決まっていた。

「歩く変態」

……あ、なんか固まった。

いやだつてさあ……海パンなら大まけにまけて許せる範囲かもしれないけど……僕の目の前にいるこのおっさんはティーバック一丁なんですよ?

悲鳴を上げなかった自分がすばらしすぎるよ。っていつかこんなおっさんをさっきまで相手にしてたのか?ジャンヌは。

案外苦労人なんだなあ、ジャンヌも。

「歩く変態などとは人聞きの悪いぞ、ルミナ殿。歩く芸術といってもらおうか……ヘブウツ!!」

面倒臭くなったので僕はジャックマンのどてっばらを容赦なく殴りました、テヘ

だいたい何が歩く芸術さツ!!歩く変態だよツ!!わいせつ物陳列罪で逮捕だよ、この人ツ!!

あゝ、なんかこの人が来てからやけに僕の暇でランボー……かはどうかはわからないけど、ともかく僕の日常生活がぶち壊しのよな気がするよ。この人と比べるとジャンヌは幾分にもマシに思えてくるよ。いや、実際にマシだ。

「あ、あの〜」

「大丈夫だって。死にはしてないよ」

ジャンヌがティーバック一丁で倒れている変態おっさんを指差してあわわしているの僕は適当にそんなことを言う。

いやだって、大丈夫でしょ？あれだけ変態にかつエネルギーギッシュにあふれた人なんだからさあ。

「そうそうジャンヌ。僕ちよつと宿題やるから静かにしててね」

「あ、はい。わかりました」

……うん。本当に良く考えてみると普通、というかまともだ。敬語口調だし。

変態おっさんの妹とはとても思えないほどだよ、まったく。

「宿題ですと！？ルミナ殿」

「うわぁッ！！」

いきなり目の前におっさんのドアップはやめてくれよッ！！って
いうかおっさんの髭がチクチクと痛いつてッ！！そこまで接近する
意味がわからないッ！！

それに復活するの早ッ！！さすが……といつていいのかな？この
場合。

しかもいつの間にかティ バックから海パンに着替えてるッ！
！（念のためいっておくと上半身裸です）

「そ、そうだけど……何？」

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
うううううう」

「いや意味わかんないつてッ！！妙な含み笑いで要件早く
いってよッ！」

「実はな、ルミナ殿。勉強を効率よくするためのマル秘アイテムを
余は持っておるのだ」

「え！？」

おおッ！それってあれかなあ？

ドラ もんチックな科学的に解決できないほどのオーバーテクノロジーな道具を出したりするの？

ああ、おっさん。さっきまで変人扱いしてごめんよ。今も実はまだ変人扱いしてるけどさ。

「ふふふ。気になっておるようだな。よかろう、すぐに見せてやろ
うッ！」

期待に胸を膨らませる僕。

そしてジャックマン（敬意を表しておっさんとはここでは呼びません）は片手をそのまま海パンの中に……………え！？

中に！？何の中に手を突っ込んだ！？海パンツ！？……おい、ちよつと。

ゴソゴソ……

ちよつと……。

ゴソゴソ……

[illegible]

なにこの人さりげなくしかも当たり前の日常動作のように海パンの中に手をつ込んでるのさッ!!

やっぱりアンタ変態だよッ!! マジで変態だよッ!! 永遠の変人だよッ!!

そして取り出したものは……

「黒鉛筆うゝ（黒色）」

しかも普通じゃないかッ！！（怒）

なにさッ！！せつかく人が期待してたのに庶民的な道具しか出てこなかったよッ！！

なんか言い方がやたらとドラ もんチツクだしッ！！

しかも汚すぎて使う気にもならないし、触る気もしないってッ！！

「さぁルミナ殿。これを使い……グホオッ！！」

無論このあと僕は、この変態ジャンヌの兄のみぞうちにストレトパンチを見舞いましたとさ。

めでたしめでたし。

第6話 小さいころよく逆さまに穿いちゃうアレ（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第7話 平穩はちよつとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ……

それはとある平日に突然と起きてしまった……。

その日、僕こと遠藤ルミナは、いい加減飽き飽きしている中年のおっさんが運動不足を解消するにはもってこいの、家から学校までの道のりを猛スピードで自転車をこぎ、そして遅刻ギリギリの時間に学校にたどり着いていた。いつものことだから、僕はあまり気にしないけどね。

だけど僕は後々思っただけど、ここまでだったのさ。『いつものこと』で終わらせることができたのはね。

「よおルミナ。あいかわらず元気か？」

教室に入るなり、僕にそう声をかけてくるのは小学校からの友人……それも腐れ縁となっている『後藤哲哉^{トウフテツヤ}』。名前はいかにも哲学者っぽいのにアルコール度数20のワインを一気飲みしてベロンベロンによっぱらっているナメケモノより頭は悪い。名は体をちつともあらわしていない良い例がここにいる。

ついでに補足的に言つと、僕はこいつのことを名前で呼ぶことはしないね。代わりにこいつにピッタリのニックネームで呼んであげている。

「元気、ねえ……。正直五分五分つてところだよ、エロ哲^{エロテツ}」

エロ哲、それがこいつのニックネームさ。

読んで字のごとく。エロい+名前の哲哉の哲。

現にこいつは中学三年のときまで女子のスカートをめくって愉しんでいた真正正銘のテロリストならぬエロリスト。それでしょっちゅう特別指導を受けているにもかかわらずそのときはやり続けてい

ただ。

さすがに高校に入ってからはやっていないんだけど、何らかの禁断症状が出てやってしまう可能性がないとは言い切れないので、腐れ縁ながら一応友人として心配している。ついでにナンパ癖もあるけど、こっちのほうはまだに治っていない。

正直止めてほしいとばかり僕は思っている。恥ずかしいからね。

「なんでだ？」

「いや……。ここ最近変態おっさんを嚴重に取り扱い続けているからさ」

「だれだ？そりゃ。俺の知らないおまえの友達か？」

友達……。微妙だね。

一般的にあのおっさんはお近づきになりたくない人間ナンバーワンに君臨するだろうしね。極論を言うなら、ゴキブリとあのおっさんをどちらか選べと言われたら僕はゴキブリを選ぶ自信があるよ。極論だけど。

それに比べたらあのおっさんの妹は、あのおっさんと比べるのが失礼と思えるくらい良い娘だよ。天然でボケてるところがあるけど、アティトラン湖の水面で白鳥&ユニコーンと戯れている女神と妹のほうを例えるならば、おっさんのほうは手賀沼で潜水で泳いでいるアメーバさ。

悪い人ではないんだけど、普段の姿が犯罪だからね。そう思ってしまうのも無理はないと悟ってほしいね。僕の心の声を聞いている誰か。

「それはそうと、ルミナ。知っているか？」

「なにをさ？」

何かわからなかったので僕はエロ哲に聞いてみた。

「今日、うちのクラスに転校生がやってくるんだとよ」
「て、転校生？」

初耳だ。と言っても僕はついさっき教室に入ってきたわけだから知らないのも無理はないと思う。

それにしてもこいつはどこからそんな情報を仕入れてくるんだろうか。

「ずいぶんと急な転校だね」
「たしかにな。噂によればその転校生、外国から来たらしいぜ」

どこからそんな噂を仕入れてくるのさ。そしてどこでそんな噂を流している人物がいるのか教えてほしいよ。……そう言えば、噂の発生源な人ほど「噂によると……」みたいなことを言うらしいけど。エロ哲はそんな僕にお構いなしに話を進める。

「しかもその転校生、二人いるんだってよ」

二人……。双子なんだろうか？

僕がそんなどうでもいいことをエロ哲に訊こうとしたとき、教師が入ってきたので結局訊けなかった。

それにしても二人も転校生がこんな中途半端な時期にやってくるなんて……。まあ家庭の事情かなんかだろうね。

「えー。実はみんなにお知らせがある」

教師がそんなことを言っていた。そしてその後続く言葉を、僕はなんとなく予測できているわけさ。さっきのエロ哲の会話のおかげで。

「実は転校生が、このクラスにやってくるようになった」

その瞬間、「おおッ！」とか「マジッ!？」とか「誰かさっきオナラしただろ?」とか……若干関係ないものが含まれていたりもしたけど、そのような歓声が沸いた。

それを教師は「静粛にッ!」と、ここは裁判所か!とツツコミを入れたくなるような言葉を言ってクラスを静かにさせた。

「よし、入ってきなさい」

教師のそんな言葉とともにガリリと引き戸がスライドする。そしてその人物たちが教室に入ってくるなり僕は、

「……………」

……………と、ごめんごめん。つい我を忘れていたよ。

とにかく僕は驚いて言葉の一つ、「あ」の一字一単語すらも発言できないほど驚愕して言葉が出せなかった。

そしてそんな僕に気づかず、教師はその人物たちの名前を紹介した。

「紹介しよう。今日からこのクラスの一員となる、ジャンヌ・ダルクさんと、ジャックマン・ダルク君だ」

第7話 平穩はちょっとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ……

その

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
(月1回)

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダ
ルク」に投票です。

第8話 平穩はちよつとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ……

その

「紹介しよう。今日からこのクラスの一員となる、ジャンヌ・ダルクさんと、ジャックマン・ダルク君だ」

哑然……。　　っていうか、何であの二人が学校に!?

お金はどうしたの!? 僕の銀行の口座から勝手に引っ張り出して学校にやってきたわけじゃないよね?

僕以外の生徒のみなさんは「おおッ! あの女の子、かわいいー!」とか「あの女の子、帰国子女かなあ?」とか、ジャンヌのことをいろいろと話題にして騒いでいた。

……気のせいかな、ジャンヌの隣にいるおっさんについては誰もがノータッチだ。気持ちにはわからなくもないけどね。

すると教師が再び「静肅にッ! 厳肅にッ!」とか言ってガヤガヤとうるさかったクラス内を黙らせた。……ここは教師の台詞にツッコミを入れるべきなのだろうか? 「ここは裁判所かよッ!」て。

「あの……ジ、ジャンヌ・ダルクです。みなさん、宜しくお願いします」

クラス内が再びうるさくなる。……主に男子だけだ。

どこからおもなく「萌え　　ッ!」とか聞こえているのはたぶん幻聴だ。そしてそう叫んでいるのがあのエロ哲なので、後でこの教室の窓から胸倉をひつつかんでそのまま捨ててやる必要があるかもしれない。……いや、是非そうするべきだね。

そして教師が再び礼の裁判所チックな台詞で教室内を黙らせた後、今度はあの変態おっさんの自己紹介である。

「はじめましてえゝ　ボクチンゝ、ジャックマン・ダルクって言い

まあゝす
」

気持ち悪ッ！教室内の温度が一気に絶対零度にまで下がったような感覚を受けたよッ！！

しゃべり方がやけに乙女チックだし、裏声使いまくりだしッ！

「えゝつとお、歳はあゝ、十六歳でえゝつすう
」

嘘つくなッ！！

外見は明らかに三十路みそじッ！かつこよく言つとM I・S O・Z Iッ！
歳もバリバリの三十歳でしょうがッ！ちなみにフラれた回数千七百十七回ッ！！面倒臭いなあ千七百十七回つてッ！1717のほうがいい気がするよ。

あとその気持ち悪い裏声で乙女チックなしゃべり方をやめえいッ！！

「へえゝ、そうなんだなゝ」

「大人っぽいねゝ」

……てええええええッ！？

あっさり信じちゃってるよ、クラスの皆様ッ！

大人っぽい、とかそういうレベルじゃなくて、もっとほかにツッコむべきところがあるでしょうがッ！

「えゝつと、それとあゝ、趣味はあゝ、お花畑でユニコーンと戯れることであゝつす
」

バリバリ120%で嘘つくなッ、だから！

ユニコーンなんてこんな都会の場所でヘドロが流れているようなドブしかない場所には住んでいないってッ！！

「ではみなさん。なかよくするように」

「「はぁい」」

ええ ！？

いいの！？ホントにそれでいいの！？

なんだかツツコむべきところがたくさんありすぎてツツコミ担当の僕としてはかなり辛いところがありますよッ！

ただでさえ巻き込まれ型人生歩みまくっているのに、このままじゃあツツコミし損ねたボケが後々飽和して全世界が崩壊してしまうッ！！

てなわけで昼食時、僕は真っ先にジャンヌとジャックマンの襟首を引っつかんで、そのまあ学校の屋上まで直行した。

後ろから「遠藤ッ！ひとりじめはするいぞッ！」とかいつの間にか男子の中で即行で結成された「ジャンヌ様FC」^{ファンクラフ}のみなさんが叫んでいたように思われたが、そんなこと気にしていられない。

「……それで、なんですか？ルミナ殿。余たちをこんなところで連れてきて」

その台詞を本気で言っているのなら、僕はあなたを屋上から突き落とさなければならいんですけど……。

「ま、まあまあルミナさん、落ち着いてください。ルミナさんが聞きたいことは『なぜ私たちが学校に来たか』でことですよね？」

僕は頷く。

「なんと、そうだったのですか？余はまったくわかりませんでしたぞ……………っと！？ルミナ殿！？いきなり余の胸倉をつかん、で……………そ、そちらはフェンスがついておりませんが……………まさか……………何を
するおつもりです！？」

「……………いや、バカは死ななきゃ直らないっていうけど、その実験を
しようと思ってさ」

「落ち着いてくださいッ！ルミナさんッ！！兄の無礼は私が謝りま
すからぁッ！！」

と、必死に哀願するジャンヌを見て、僕は仕方なしに、この変態
三十路おっさんを屋上から突き落とすのを止めた。

「それで、なんで学校に来たのさ、二人とも」

僕が単刀直入に質問すると、

「そ、それは……………」

とジャンヌは僕から視線を逸らしてジャックマンへとその視線は
移動する。

……………なるほど、読めた。

「……………あんたのせいかな」

僕はギロリとジャックマンを睨む。
すると、

「だってだってえ、余も学校とやらに行きたかったんだモンツ！」

……やめてくれ、そのダダっ子口調。おっさんがやると見た者の目の組織が آپトーシスを起こしてしまうからさ。

単刀直入に言つと気持ち悪いからさ。

「それはまあ一億五千万歩譲つたとして、入学金とかはどうしたのさ？」

「バクチで稼いだ」

うつわあゝ……。なんじゃ、そりゃ。

つていうか、そのバクチの元のお金は誰もお金なのだろうか？僕しかないような気がする……。

そう考えるとこのおっさんは、僕のお金を勝手にバクチに使つて、そして儲かった分のお金を使ってこうして入学してきたわけか。ジヤン又と一緒に。

「まあ、いいではないか。損はしてないことだし、ここは大目に見てやってはどうかね？」

「おまえが言つな」

はあ……。なんで？

何で僕の人生はこう……無茶苦茶なわけ？

ため息をつきたくなる、今日この頃の出来事でした。

第8話 平穩はちょっとしたことで消えてなくなるものだよ、ハハハ……

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
(月1回)

ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ジャンク・ダ
ルク」に投票です。

第9話 呪文って、暗示みたいなものかなあ〜？と思う今日この頃

ジャンヌたちがやってきてそろそろ一ヶ月が経過したその日、僕はとにかく疲れていた。うん。そりゃあ〜もう疲れていたんだ。

理由は変態おっさん（ジャックマン）がやたらと変態行動しまくるせいだね。おかげで僕が住んでいるマンシヨンの七不思議にもなっちゃったりしているんだ。

その内容が「真夜中の一時頃になるとティ バックー丁のおっさんがマンシヨンを徘徊している」とかいうもので……そんな時間にあのおっさん何やってんだろうね、ホント。

それだけじゃなく、なんと最近になってこのおっさん、僕が通っている学校にまで入学してきたんだ。

もうホント、勘弁してくださいませんか？

まあ転校してきたのがこのおっさんだけじゃなくてジャンヌもなんだけどね。

ジャンヌのほうは比較的普通、というか真面目で、最近ではこの時代での生活になれてきたのか台所で僕の代わりに料理を作ってくれたりする。それがまた美味しいから文句なしだよ。

それに比べてあのおっさんは……毎日毎日厄介な変態騒動を持ち込みやがってッ！

ジャンヌがあんな良い子に育ったのもおそらくあれだ、反面教師とかいうやつだろうね、きっと。

その点では変態おっさんには感謝するべきかも知れないけど……。

……はあ。おっさんの今の性格がどうにかなってくれたらなあ〜。

「ただいまあ〜」

「聞きましたぞッ！！ルミナ殿ッ！！」

「うわぁッ！！」

扉を開けるや否や、ぼくの視界が三十路みそじの男の顔で埋め尽くされたッ！っていうか登場が唐突過ぎるってッ！！

「……なにを聞いたの？ ジャックマン」

一応訊いてみる。

「ルミナ殿が余の性格がどうにかなってくれたらなあ、ということですぞ」

「……」

……なに？ この人。

ジャンヌだけでなくこの変態おっさんにもテレパシ 能力ありですか？ 人の心読んで……。

「そんなルミナ殿にピッタリのビッグアイテムを手に入れましたぞッ！！」

そう言いながら変態おっさん（あいかわらず上半身裸で海パン一丁。っていうか初登場時に着ていた白衣はどこいったんだ？）は自分の片手をズブリと海パンの中に突っ込む。……この変態めがッ。そして取り出したものは、

「プリ ユアステッキ」

見た目がなんだか魔女っ子モノのステッキが出てきた。っていうか何？ 名前とはまったく関係なさそうな機能がついてそうなんですけど、それ。……ていうかその名前、大丈夫？……まあ、伏せ字にしてるからいいけどさ。

「このステッキを使えば、対象となる人物の性格を変えることができる超スグレ物のステッキですぞッ！」

「というか近づけないでっつッ！そんなところから出したもの誰が使うかッ！！使うとしたら本人だけだっつッ！！」

僕にそう言われるとなにやら洗面所まで行って水を流す音が聞こえ始める。 どうやら洗っているみたい。まあ、いいけど。

やがて戻ってくる変態おっさんは僕にあのやたらとネムが長いステッキを僕に差し出してくる。

……まさか使えっつてことなの？そんな予感ほしてたけどさ。

多少躊躇しながらも、僕がこの謎ステッキに手を触れて実際に使わなければこの小説はここで終了してしまうので、物語の進行上、僕はおそろおそろながらそのステッキを持った。

「おおッ！似合ってますぞッ！ルミナ殿」

果たしてジャックマンのこの台詞を聞いて、僕は喜んでいいべきなのだろうか。

ちなみに先ほどの言葉は疑問系ではなく反語なので、そのころヨロシクッ。

シャララァーン、となんだか振ればラブリーファンタジックな星がたくさん出てきそうなデザイン。

子供のおもちゃとしては百点満点をあげてもいいくらいだね。

しかし困ったことにこれはおもちゃじゃないらしい……ジャックマンのいうところによると。

「……じゃ、ためしに一回だけ使ってみるか」

「うむ、そうしなされ」

こういう意味不明で謎で未確認物体を扱うときには、かならずテ

ストプレイをしなければならぬのは、皆さんもわかってもらえると思う。

だから、実験してみることにしたとき、

「あッ！ルミナ殿ッ！合言葉は『ピリカ・ピリララ・チョメリバ・コマネチ・ミックスジューズ・マンモスウ』ですゾッ！ちなみにちゃんと叫んでくださいですゾッ！」

……さて、僕はどうするべきか。

大体、そんな謎ワードを叫びたくはないってッ！ホントにッ！わかってくれるよね？

「さあ！どうしたのですか？ルミナ殿ッ！そんなことでは立派な魔法使いにはなれませんゾッ！！」

そもそも僕はそんなものになる気はないんですけどね。ハハハ……。

「そんな細かなことを気にしては将来宇宙親善大使にはなれませんゾッ！！」

そんな役職ができる前に、僕はとくにこの世から姿を消している可能性大ですけどね。人生八十年ですよ。

八十年の間に人類が宇宙で暮らせるまでの技術が発達するとは思えないしね。

「さあ、ルミナ殿ッ！とりあえずそのステッキをつか……………」

「ピリカ・ピリララ・チョメリバ・コマネチ・ミックスジューズ・マンモスウッ！！ドラ もんののび みたいに『メガネ、メガネ……』と叫びながらメガネを探すモノマネができるような性格になり……」

なさい」

物語を進ませるために、僕は合言葉を言っ、自分でもわけのわからない言葉を適当に羅列して適当な性格を言いながらステッキを振るうと、なんだかステッキから『ミヨロリィン』とか、なんだか「効果音にしても、もったいいいものがあるはずだろうがッ！」とツツコミを心の中で入れつつも、ともかくそんな効果音とともにステッキの先からスーパーマ オのファイヤー ールみたく火炎弾が発射ッ！

そしてその火炎弾がそのままジャックマンに襲いかかり、ジャックマンはなぜか火あぶりの刑になっていた。

…… ああ、なるほど。わけのわからない性格を僕が言ったから「そんな性格のほうかよほどマシだと思えるとは、キミはよほどこのおっさんに苦労してるんだね？ わかったわかった、皆まで言うな皆まで言うな。我輩がこのおっさんを抹殺してやるうッ！ 永遠にッ！」とステッキが勝手にそう解釈したからだろうね。…… そういうことにしておこうよ。うん。

ちなみにその後、ジャックマンがどうなったのかは、誰も知らない……。

第9話 呪文って、暗示みたいなものかなあ〜？と思う今日この頃（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。（月1回）

ネット小説ランキング>現代F.Tコミカル部門>「ジャンク・ダルク」に投票です。

第10話 闇にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なら目立つ

それは、僕が夕食の材料の買出しから帰ってきたときのことだった。

「てことで、余は探偵になるぞよッ！」

……みなさん、どうもすみません。唐突過ぎて……。

「……なにが、『てことで』なのさ？」

いったいどんな経緯があつて、そんな決意になったのか、僕はそれが知りたい。ほら、僕の隣で正座しているジャンヌも困惑している様子だし。

するとジャックマンは、

「ひよっひよっひよ……。余は気づいたのだ」

「なにを？」

それと、どうでもいいけどなに？その笑い。いまだきそんな笑いする日とないと思うけど……。

「悪を根絶やしにするには、探偵になるしかないとッ！-」

……うん、ツッコむべきか、ツッコまないべきか。そもそもツッコんでいいのかわからないような内容に、僕は戸惑いが隠せない。このおっさんの考えることは唐突過ぎるために僕の頭の回転が追いつかない。フルで頭のギアを回転させているけど今のところスリッパして空回り気味……。

と、ここで僕の耳元でジャンヌが、

「実はルミナさんが夕食の材料を買いに行っている間、コンの再放送があつて、それに影響受けちゃったんですよ」

どうやらこの時代にやってきたジャンヌたちはテレビの使い方を覚えてくれた様子……それでもつて、覚えた矢先からジャックマンが面倒ごとをつくらうとしているわけ、か。

……ふふふ、泣きたくなってくるよ。

「……まあ、そう思うのは勝手だけど、せいぜい他人を巻き込まないでよ、ジャックマン」

「え」

え、とか言うなッ！！巻き込む気満々だったのかよッ！！しかもその巻き込まれる人が僕とジャンヌである可能性が非常に高いッ！！
というかそうとしか思えないッ！！

「だいたい事件とか、身近に起きているわけがないってッ！起きてほしくもないしッ！」

「え。いやじゃいいやじゃいッ！！オイラ探偵になって事件を解決したいんじゃないッ！！」

気持ち悪いからやめいッ！！

「ジャンヌ、君からもこのおっさんになにか言つてよ」

「え？私ですか？」

矢が飛んでくるとは思っていなかったのか、ジャンヌは戸惑いながらも考える素振りをする。その間、駄々っ子おっさんはバタバタ

と手足をばたつかせている。近所迷惑だからやめてくれ。ここマンシオンだし。

そして、ジャンヌが口に出した言葉は、

「……お願いします。ルミナさん」

「……」

……それってつまり……「自分はお手上げです。あとはお任せします」って意味ですか？

「それでは私、ルミナさんの買ってきた材料で夕食作らないといけませんので」

と、そそくさとその場を退散して台所へ。

へえ、ジャンヌって台所の使い方も覚えたんだ。……まあ、いつも僕の近くで料理を作るところ見ていたからなあ………って、逃げたッ！？逃げましたねッ、ジャンヌさん！！

飯にも兄妹きょうだいなんだからさあッ！！「ここは私にお任せください。喰い止めてみせます」チックなバトル漫画で味方を先へ行かせるような気の聞いた台詞を言っただけに「わかった。ここは君に任せる。」

……死ぬなよ「くらい言わせてよッ！！」

……嗚呼、どうしよう。ここは僕もこの目の前で駄々っ子になっているおっさんから逃げて、夕食の準備の手伝いしようかなあ。

「オギヤ スッ！！オギヤ スッ！！」

とうとう怪獣の赤ちゃんみたいな泣き声を上げる始末。……いかん、逃げちゃダメだ。このおっさんをこのまま野放しにしていたら、近所のみなさんの怒りを買ってしまうことになってしまう。

「はい。ありがとうございます」

柔らかな笑みを浮かべつつ、ジャンヌはそう言った。……よくできた妹さんだよ、まったく。先ほどまで超音波並の奇声を発していたどこぞのおっさんの妹とは思えないよ。さては反面教師としての役割をジャックマンはしているのか？二十四時間海パン一丁、上半身全裸、他人に迷惑かけ過ぎ、加えて千七百十七……めんどくさいなあ、１７１７回女性に告白しているところからチャラチャラしている……おおッ！！ダメ人間の塊じゃないかッ！！反面教師としての素質は十分だね、うん。

「……ジャックマンってさ、ずっとあんな感じなの？」

「あんな感じとはなんでしよう？」

「いや……単刀直入に聞くけど、あんなに変態だったの？」

「ホントに単刀直入ですね」

「下手にごまかしたら悪いと思って……」

「……」

なにか言いたげな視線を発していたけど、ジャンヌはあゝ、と息を吐くと、

「まあ、そうですね。基本的にあんな感じでした。……けど」

「けど？」

「頭はすごく良いですよ。IQ500ですし」

……ん？なにか幻聴が聞こえたような。

「IQ……が、どうだった？」

「ですから、IQ500なんですよ」

「誰が？」

「兄さんが」

僕は居間にいるジャックマンを見る。そこにいるのは三十路で、初登場時に着ていた白衣すら着ていない四次元ポツト的な能力を持つている海パン一丁の、客観的視点から見れば百人中百人が変態と口をそろえて言うであろうおっさんが寝転がってテレビを観ていた。ときおり尻をポリポリと掻きながら……。

「ジャンヌ、嘘をつくんならもつと現実味がある嘘をつこうよ」

過去から手違いでタイムマシンに乗ってきた人に、現実味なんて言葉が通用するのか僕的には疑問だけどね。

「嘘ではありませんよッ。本当のことです」

「いやだって……アレだよ？アレ」

台所のカウンターから居間の様子が見れるようになってるんだけど、そこにいるのは、ときおり尻を掻きながら寝転がってテレビを観ている中年オヤジがいる。

これを見てあのおっさんがIQ500の天才的秀才的頭脳を持っているなんて、思えるわけがないよ。

「ま、まあ……。それは、たしかに……そう、ですが………」

それをつかれると反論できないみたいで、ジャンヌは僕から視線を逸らし、言葉をゴニョゴニョさせる。

……まあ、これ以上ジャンヌを困らせるのも悪趣味だと思い、夕食の準備の続きをしようとしたその矢先

「怪盗になるぞよッ!」

そんなジャックマンの言葉が、僕の家には響き渡った。

第10話 闇にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なら目立つ

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
(月1回)

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダ
ルク」に投票です。

第11話 闇にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なら目立つ

「怪盗になるぞッ!!」

ぞよ……ぞよ……ぞよ……と、どうでもいい語尾が僕の頭でリフレインされる。

「……ジャンヌ、のタマネギ取って。皮剥くから」
「あ、はい。わかりました」

聞かなかったことにしよう、うん。何事も厄介ごとにかかわらないべきだよ。山火事が起きてて、わざわざその火の海に飛び込む必要はないしね。

「無視しないで下されッ!!ルミナ殿ッ!!ジャンヌッ!!」

わかってますよ。遠慮なく無視させていただきます、ジャックマンさん。

「……初号機に残された予備電源で、本部を破壊しますぞ^{いえ}」

初号機なんてどこにもないって。

ついでに言うと、零号機も二号機もないよ。

「……だいたいさ、ジャックマン。さっきまで『探偵になりたい』とか言ってたかったっけ?」

「ひよっひよっひよ……。余は気づいたのですぞ」

気づかないでほしかったよ……。あとなに?その笑い方。せめて

「ふっふっふ……」にしようよ。

「それで兄さん。気づいたって、なにを？」

ああッ！ジャンヌッ！！喰いつかないでよッ！！今の君は畏にかかった白鳥同然だよッ！！……て、僕もかな？もしかして……。

ジャンヌの言葉に気が乗ってきたのか、ジャックマンは雄弁に語り始めた。

「余は気づいたのじゃッ！！」

その台詞、さっきも聞いたよ。あまり長くはできないんだから無駄な行埋めは控えてよ。

もつとも、僕がこの言葉を声として出せば、無限ループとなるんだけど。無限とつくものはスーパーマ オの無限1UPテクニクだけで十分だよ。

「怪盗 ツドはかっこいいということにッ！！」

……。さっきテレビで観ていたものはたしかニュースでしたよね？ニュースを観て、なぜ怪盗 ツドが出てくるわけ？

「だから余は、怪盗になるのじゃッ！！」

かっこよさを求めるあまりに犯罪者になるってわけ？この人は。犯罪したらかっこいいもクソもないって、どうして気がつかないんだろうね。

「何馬鹿なこと考えているんですかッ！！犯罪をしたら本も子もありませんよッ！！」

ジャンヌの意見に僕は心から同意。

「今ならまだ間に合うよ、ジャックマン。だいたいどうやって怪盗になって美術品とか盗むつもり？」

僕のそんな言葉に、

「心配無用ですぞ、ルミナ殿。そのために余は秘密兵器を用意しておりますのじゃ」

とか言って海パンに両手を突っ込み、ゴソゴソとあさはじめる。
……下手に詳しく描写すると連載停止だね。変態道、ここに極み有り。

そして、例の場所から出てきたものとは、

「通り抜けープウー」

捻りもへつたくれもないしッ！！口調もどついつわけかドラマも
ん口調ッ！！

「まずいつて、ジャックマンッ！！もしそれを使ってしまったら著作権的にまずいつてッ！！」

「ご安心ください、ルミナ殿ッ！！この小説そのものが著作権ギリギリですからッ！！」

なおさらまずいと思うのは僕だけか！？

「それでは手始めに、隣に住んでいらっしやる若奥様の下着を拝借しに行ってきますぞ。……ムフ」

おおおおおおおいッッッ！！！！そりゃ怪盗じゃなくて、ただの変態下着ドロでしょうがッ！！しかも僕の家から通り抜けープ使う気かよッ！！僕に嫌疑かけられまくるじゃないかッ！！おまけに最後の「ムフ」てのはなにッ！？やっぱこのおっさん変態だよッ！！

「さてと……ア　ロ、いつきまゝす　……なんちって」

「ああッ！！？人がツツコミで忙しいときに何密かに犯罪実行しようとしてるのさッ！！やめろってッ！！マジでッ！！ここで僕が逮捕されて連載停止になっちゃったら読者の皆さんに申し訳がたたないじゃないかッ！！！」

「大丈夫ですぞッ！！この時代のこの国にはモザイクやピー音という伝統があるので、それでカモフラージュすれば、だいじょう^{ブイ}ですぞ！！！」

「全然だいじょう^{ブイ}じゃないってッ！！！」

夕食の準備をほったらかして、変態おっさんにしがみつき、犯罪を阻止しようとする僕。

それでもおっさんの動きは止まることはなく、このままではこのおっさんが犯罪行為　隣にいる若奥様とやらの犯罪の一部始終を見られる　ジャックマン逮捕　共犯の疑いをかけられ僕も逮捕（ジャンヌは女性のためセーフ）　牢獄行き　連載打ち切り………ということになってしまうッ！！なんとしても止めなければッ！！

「むっふふう　いざ行かんッ！ネバーランドヘッ！！ですぞ」
「だから止めてくれってッ！！待っているのはネバーランドじゃなくて牢獄行きの片道切符売り場しかないってッ！！」

……くそッ！なぜ！？なぜ僕がこんな目に会わなきゃいけないの

さッ！！誰か応援求むッ！！
と、そのとき、

プシュッ

そんな音が聞こえたかと思うと、ジャックマンの動きが突然止まった。そしてそのままバツリと倒れる。

さては、……………電池が切れた？

「そういえばジャックマンの裏設定に「オキシライド単4電池一本で動いている」というもんがあったような……………」

「ありませんよ。そんな裏設定」

「やっぱり？」

そう言いながら後ろを振り返ると、そこには腕時計を片手に持っているジャンヌがいた。

「…………その腕時計、なに？」

「これですか？」

…………まさかとは思うけど、聞いてみることにする。

万が一にでも、その名前がコンのアレだったら…………僕は禁断の技を使うしかあるまい。

「いつの日かは忘れてしまいましたけど、これは兄さんからもらった時計型」

ピ

.....

ピー音で、すべて解決だあッ！！（やけくそ気味に言うのがコッ）

第11話 闇にまぎれて美術品とか盗むのが怪盗なのに、服が白基調なら目立つ

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
(月1回)

ネット小説ランキング>現代FTコミカル部門>「ジャンク・ダ
ルク」に投票です。

第12話 片道切符は超不便です

ジャン又たちがやってきて、なんだかんだで一ヶ月以上が経過して、僕もそろそろ二人の扱いに慣れてきたかなあ、と思ったりもしている頃だと思うんだけど、どういわけか慣れないんだよねえ、これが。

ちなみに今、僕は学校の下校中んだけど、ジャン又とジャックマンとは一緒に下校していない。なんかどこか寄るところがあるよ、うんだけど……ジャックマンが。

そしてそのジャックマンが寄りたいところって言うのが、「こんなあつたのか!？」と思うところだ。

店の名前は『THE ラヴリー ふんどし屋』。通学路にある店なのに僕が今までツツコミを入れなかったのが不思議だ。

僕もジャックマンが何かしでかしたらダメだと思って店の一步踏み入るところまではついて行ったんだけど、店長の姿を見たら三歩退いた。

裸エプロンにモジャモジャとめさせ千畳ツ!とばかりに伸びているアゴヒゲ。それにフンドシー丁、しかもやたらとハートマークがついた悪趣味の中の悪趣味を代表する格好だったからだ。

本来ならジャン又と一緒に家に帰るべきなんだろうけど「兄さんの世話は私の務めですの」と言っでジャックマンに付き合っている。そんな務め、捨てればいいのにね。

「ただいマンモス」

特に意味もない意味不明な帰宅の挨拶を我が家の出入り口の扉を開けて言う。返ってくる挨拶はないのが当然なんだけど、

「バブー」

.....。

.....。

.....。

..... バブー？

なんだろう？僕の耳に変なヴォイスが聞こえてきたような。しかもそのヴォイスがやたらと「おいッ！ 太郎ッ！」で有名な目おやじチックだったし。

おそろおそろ今に行ってみると、そこには、

「バブー」

と赤ん坊がひとり。

..... はい？

なにこれ？どこからわいてきたの？

僕が突然のことに頭が真っ白になっていると、

「ただいまンゴープリンとバーコードハゲはセットでお得々ですぞ
..... って、おうッ！？」

と、わけのわからない帰りの挨拶を言いながらジャックマンが居間にやって来、そして赤ん坊を見るや否やピタリと止まる。まるで石化の魔法でもかけられたかのようなだ。

片手にはビニール袋があり、『THE ラヴリー ふんどし屋』とプリントされているところから察するに、どうやらあの店で何かを買ってきたみたい。..... お金はどうしたんだろう？

そしてその後が続いて、

「ただいま帰りました、ルミナさん……………って、え？」

とジャンヌが居間にやって来、そして赤ん坊を見てピタリと止まる。ジャックとおんなじ反応。

しばらくの沈黙が流れる。その間赤ん坊は「バブー」とか言いながら僕に向かってロケットずつ気をかまし続けてくる。アツハハハハハ……………、意味もなく笑うしかないよ。

そして、

「……………ルミナさんの子供？」

「違うッー!!」

ジャンヌの質問に、僕は即否定した。いったい何をどうしたらそんな勘違いができるのさ。

すると突然、

「フッフッフッフ……………。やれやれ、我輩のことを忘れてしまったんか？ジャンヌ、それにジャックマンよ」

どわぁッー!!赤ん坊が突然しゃべりだしたよッー!しかも目 おやじヴォイスでッー!! ていうか最初の含み笑いはなに!? 入れる意味ないんじゃない!?

ただどどういうわけか、ジャンヌとジャックマンはこの赤ん坊に心当たりがあるらしく、

「まさか…………ジャンヌ殿ぞよか？」

「その通りじゃ、ジャックマン」

……………どうでもいいけど、「ぞよか」って何よ? そんな語尾初

めて聞くよ。それにしても目 おやじチックなしやべり方するなあ、この赤ん坊。僕はせめて、バカ ンのハ メちゃんみたいなしやべり方をしてほしかったなあ。

「ジャン兄さんなんですか？本当に？」

「フォッフォッフォ……。本当に本当じゃ。我輩はジャン・ダルクじゃぞ、ジャンヌよ」

ジャン・ダルク？……それってまさか……………。
するとジャンヌは、その赤ん坊を抱えて僕に、

「紹介します。私の兄であるジャン兄さんです」

やっぱりいいいいいいいいッ！！！！（なんで僕がジャンについて知っているかは第2話を見てください）

「ジャン殿、少し背が縮みましたかな？」

「本当です。たしか170センチはあった気がしますけど…………」

おお いッッ！！背が縮んだって、そういうレベルじゃないだろッ、それってッ！！明らかにジャンヌの兄を自称するにはパッと見の年齢がおかしいってッ！！

「うむ。実はな、タイムマシンを使ってここまでやってきたんじやが、どうもその副作用らしくてのう。その副作用のせいで、こうなってしまったんじや」

僕は部屋の隅っこに置かれている棺桶型タイムマシンへと視線を移動させると、蓋が開いていた。どうやらこの赤ん坊……否、ジャンの言っていることは本当らしい。

「それにしてもジャン兄さん。どうしてここに來たのですか？」

と、もつともな質問をジャン又はジャンにした。僕も確かに知りたい。そしてできることなら即刻帰ってほしい。これ以上僕の平穩を乱さないでほしいからね。

するとジャンはこう答えた。

「気分じゃ」

気分ね。なるほどなるほど。

……………ざけんな、目 おやじ。

「それじゃ、悪いんですけど即刻帰ってくれませんか、ジャンさん」

「あ、それ無理じゃ」

「なんで？」

「じゃってあのタイムマシン。向こうからこっちにしかこれないよ
うになってるんじゃないかの。のう？ ジャックマンよ」

…………… あんだって？

僕は視線でジャックマンに問う。

「そうですね、ルミナ殿。だから余たちもずっとここにいますよ」

ジャックマンのしゃべり方が微妙におかしいのはこの際目をつぶ
ろう。

…………… なるほど、確かに。いまさらながら納得だ。 ていう
か、そんな不完全なものを使うなよッ！！

「 …… ってことで、よろしく頼むぞ。 …… えーっと…………… 太郎」

……ッコミを入れる気も起きなかった。

第13話 それでは、主人公のオーラの色や前世や守護霊が何か、見てみましょ

【おうらの泉】

「みんなの『おうら』や前世、守護霊なんかを調べて、人生アドバ
イスをする『おうらの泉』。司会はおなじみ、ジャン・ダルクじゃ」

……………。

「さてさて、今回のゲストは、遠藤ルミナさんじゃ。なんじゃか
ともやつれているように見えますが、大丈夫ですかな？」

…………… そういう問題か？

「…………… っていうか何、これ？」

「【おうらの泉】じゃ」

「いや、それはわかってるって。あからさまにアレをもじってるだ
けのタイトルだし。具体的に何をするのか聞いているんだけど……………」
「我輩がおぬしの人生相談に乗ってやろうっていうものじゃ」

赤ん坊に人生相談する気はないんですけど。

「赤ん坊ではないッ！我輩はジャン・ダルクッ！ジャン又たちの兄
じゃ」

偏った食生活でろくに運動もしないから身体が成長しなくなった
んだな、この目 おやじは。

「違う。タイムマシンの副作用でこうなってしまったんじゃ。

ちなみにジャックマンのあの変体振りもタイムマシンの副作用によるものじゃ」

嘘つくなッ！ジャックマンのアレは明らかに地だろッ！　ていうか肉親である人から見ても、ジャックマンは変態なんだな……。

「ああ、そうそう。ちなみに我輩は目　おやじの親友じゃ」
「へえ」

嘘八百吐くなよ、エセ目　おやじ。

「……用がないなら僕はこれで帰らせてもらっていいかな？……ていうかここが我が家なんだけど、僕が学校に通ってる間に何してくれた？」

「今回のこの企画を立ち上げるために模様替えしたんじゃ」

……そう。ここが我が家、のはずなのだが、どういうわけか模様替えされていた。

家主である僕に断り入れずに、だ。

部屋のカーテンはすべて真っ黒のものに変えられ、居間には四つの椅子が用意されていて、向かって左から僕、ジャンヌ、ジャックマン、ジャンの順に座っているという感じだ。

……まんまアレじゃん！

「ちなみに我が弟と妹も手伝ってくれたぞ」

僕より一足早いうちに帰宅した理由はこれだったのか……。ジャンヌは強引にジャックマンに連れ去られてみたいだけだ。

ちなみにジャックマンは今か今かと童心に返ったように……いや、もともとから童心に戻ってばかりの気もするのだが、ともかくそんな

感じにわくわくしており、ジャンヌはというと申し訳なさそうに眉尻下げながら「すいません」と、僕と目が合うたびに頭を小さく下げる。どうやらジャンヌひとりではバカ二人を抑制させることが出来なかったようだ。

本当に苦労人だね、ジャンヌは。

「それでは、ジャン殿。早速始めましょうぞ。いい加減読者の皆さんが『話の本筋に入れ』とツツコミを入れて来る気がするぞよ」

僕もそのツツコミをしたかったんだけど。

「フムフム……。それでは本格的に始めようかのう。 それではルミナ君、『おうらの泉』によっこそじゃ」

「はあ……。どうもです」

……。仕方ない。ここは手っ取り早く終わらせてから、部屋を元通りにするとしますか。ジャンヌも手伝ってくれるだろうしね。バカ二人はしないだろうけど。

「それではルミナ君よ。失礼ながら『おうら』の色を拝見させてもらいますぞ」

「はあ、いいですけど」

どうでもいいけど『おうら』って？

『オーラ』じゃないんかい、てツツコミは無しのかな？

ジャックマンは目をキラキラと輝かせている。

まるで少女マンガのヒロインのよう……。 おっさんがやって

も変人にしか見えないからやめなさい。

ジャンヌは先ほど申し訳なさそうにしていたけど、いざ始まると好奇心の目で僕とジャンヌを見ている。……。別に、いいんだけどね。

「むむッ！見えるッ、見えるぞ……」

「それで、色は？」

「白じゃな」

へえ。白って言ったらけっこう良い感じじゃないの？この人のことだから99パーセントの確立で外れているだろうけど。

「ルミナ君のパンツのいろは　　ゲフウッ！！」

……………あ　あ　。　　すいません。

ここから先はグロテスク描写が続くので十五歳以上の人は閲覧しないで下さいね

「ちょっとルミナ殿ッ！幼児虐待ですぞッ！！？」

「フッフッフ　　僕の愛包丁が血を吸いたがつてるのさッ」

「ルミナさんッ！落ち着いてくださいッ！！気持ちわかりますけど深呼吸を数回して落ち着いてくださいッ！！」

「まるで初号機の拘束具が覚醒と同時に外されたみたいですぞッ！！」

しばらくお待ちください

「では次は、前世を見るとしますかのう」

何事もなかったかのように進めるジャン。僕も元の席に着席して
るから人のこと言えないんだけどね。

「……あなたの前世………あなたは前世、掃除をよくしてますの
う」

……そうなの？

どこかの会社の清掃員とか？

「動きが速いですのう」

動きが速い！？

全くわからないんですけど！

高速で箒で床を掃く清掃員とか？

「……むむッ！なんと、子供がいるのじゃー！」

子供？結婚してたのかなあ？

「三十ほど」

三十！？ちょっと待ってッ！！あからさまにおかしくない？その
数字！

「しかも真っ黒じゃッ！」

真っ黒！？

……ん？なんだろ？何かを連想させるような……。

掃除好き。

動き速い。

子供たくさん。

真っ黒。

.....。

「つまりおぬしの前世はゴキブ　ゲフォファフウッ!」

「いい加減にしろよ貴様ああああああああ

!.....!」

ボコボコボコボコボコボコボコボコ.....

「ちよつとルミナ殿ッ!!!10コンボはやり過ぎですぞッ!!!しかもまだ記憶更新中!?!」

「ハハハハハハ.....!!僕の拳が唸りを上げたがってるのさあ!!」

「ルミナさんッ!!キャラ変わってますし何より落ち着いてくださいッ!!!」

「まるでメル　ラの無限コンボをリアルでやってるみたいですよッ!!!」

しばらくお待ちください

「さて、最後は守護霊じゃ。おぬしの守護霊がどんなものなのか、我輩が教えて進めますじゃ」

何事もなかったかのように再開する【おうらの泉】。.....僕も人のこと言えないんだけどね。

「守護霊……守護霊……。パパ ヤ鈴木の守護霊はパイヤ……」

いやいや！それ今関係ないでしょ！！
しかもそうじゃないしッ！！

「……守護霊、守護霊……。むむッ！来たッ！！」
「……なに？」

特に期待もせずに僕は訊く。

「自営業を営んでるのじゃ」

早くもうそ臭い。現在形だし。

「何かの専門店じゃ」

へえ。

「アゴヒゲボーボーじゃ」

……。脳内検索中。

「ハートマークのついた фондシをしてますじゃ」

……。あ、検索に一軒だけ該当があった。

「最近我輩の弟がそこで何かを購入してるのじゃ」

僕は席を立つ。そして拳を構える。

「おぬしの守護霊は『THE ラブリー ふんどし屋』のてんちよ
ゲフオオッ!!」

「デタラメにもほどがあるわあああああああああ
! ! ! ! !」

ボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボコボ
コ……………

「ルミナ殿ッ!!15コンボは酷過ぎですぞッ!!しかもまだ記憶
更新中!?!」

「『おばあちゃんおばあちゃん、どうしてそんなに手が真つ赤なの
?』、『それはねえ、リンゴを握り潰したからだよ』、『なんだ、そ
うだったのかあ』」

「ルミナさんッ!!何さり気に赤 巾の一節を改変してるんですか
ッ!しかもまた性格変わってますよッ!!」

「まるで秋 雨のごとき拳の疾さですぞッ!!」

しばらくお待ちください

「それでは人生アドバイスをしようかのう」
「いらんわッ!!」

第14話 チキチキ、奇妙奇天烈な話選手権

えゝ、こんにちは。

いや、こんばんは、かな？投稿した時刻が夜だし。……まあいいや、そんな細かいことは。

どうも、遠藤ルミナです。夏休みに入りました。

え？時間設定が無茶苦茶だって？

大丈夫だよ。もともと無茶苦茶だから、この小説は。

ちなみに最近白髪が出てきて大変です。それだけ苦労しているってことだろうね。

そして今回、また僕の頭の白髪の本数を増やすような出来事を、ジャックマン&ジャンのバカコンビが運んできたわけさ。

では、御覧いただこうかな。

ろうそくが一本、火をチロチロと燃やしており、そのろうそくを円で囲んでいる僕とダルクの愉快な家族たち。……それとプラスひとり。

「いやゝ、怪談話すんのも久しぶりだな、ルミナ」

と僕に話しかけてくるのは僕の腐れ縁の親友で今回のプラスひとりこと、後藤哲哉。通称エロ哲。

軽い性格でナンパの常習犯の上、頭は酔っ払ったナマケモノ以下だろうと推定されるほど壊滅的に悪い。欠点の水平線を低空で飛行しており、ときどき落ちる。

そんななのに、いざとなると約束事を守ったり、親友を見捨てないという義理堅い一面もあったりするのだけど……。

「いや、ジャンヌさん。今宵も貴方は美しいですねえ」

うーん、その良さが黒板の書かletaitたずら書きのようにあっさりと消されるねえ。

とりあえず僕はエロ哲の後頭部をチョップすることにした。

ちなみにエロ哲、ジャンヌが僕のところで居候しているのにかなり驚いていたな。「二人屋根の下でストロベリィな展開を楽しんでいるのかあ！」とほざいたので、僕はとりあえずグーパンチを頬に喰らわせたけど。

だいたい二人じゃないし。四人だし。

しかしエロ哲の目には最初、むっさい変態おやじことジャックマンと、幼児退化レベルどころではない見た目は赤ちゃん、頭脳はおっさんことジャンが映っていなかったようだ。

そこでエロ哲を納得させるような適当な言い訳を僕が完全アドリブで言つて、どうにか落ち着かせたわけさ。

「……それでジャックマンにジャン。ひとつ訊きたいことがあるんだけど」

「なんじゃ？」

「なにぞよ？」

「なんでまた……怪談話、もとい『世にも奇妙奇天烈な話』をしようと考えたわけ？エロ哲まで巻き込んでさ」

「んーっと……それはじゃな……」

「それはぞよな……」

「ちなみに『暇だったから』という理由以外で答えて」

「……」

「……」

おい！明後日の方向に視線を逸らすなッ！！
ていうか図星だったんかいッ！！

「……常に刺激があつたほうがいいと思つたからじゃ」

つまりは『暇だったから』って言つてると同義じゃないのか？
それって。

「さて、そろそろ始めようではないか、ルミナ殿」

ジャックマン、話逸らすなつて。

まあいいや。テキストに話進めて、それで終わればね。……まん
ま前回と同じこと考えてるよ、僕は。

ちなみに僕はそんな話をする気はない。みんなにもあらかじめ予
告をしたし、聞くだけさ。ちなみにジャンヌもこの手の話は出来な
いらしく、僕と同様聞くだけである。

よつて必然的に、エロ哲、ジャックマン、ジャンの三人だけが『
世にも奇妙天烈な話』をすることになる。たいていこういつ話つ
て怖い話や怪談話になるんだよねえ。

「よつし！じゃ、俺からいかせてもらつぜ」

一番手に名乗りを上げたエロ哲は、雄弁に語り始めた。

これは俺が小学五年だった頃だ。

たしか……五月ごろ、だったな。学校の行事で『自然学校』てのがあってな、山にある合宿所……まあ寮だな、に行つて一週間そこで泊まつて自然を満喫するって行事なんだ。まあ、ルミナのやつは覚えてるよな？

（ああ、覚えてるなあ。確かにそんな行事があつたっけ）

その寮の外にはプールがあつただけど、そのプールで昔溺れた生徒がいたらしくてよ、それ以来真夜中になるとその生徒の幽霊が現われてプールで水浴びしているっていう怪談話があつてよ。

（定番だね）

それを俺が本当かどうか確かめに行つたわけよ。ひとりでな。

そしてプールを張り込んで0時になつたくらいに、突然、更衣室から何かが出てきてよ。

初め、姿は真っ暗でよく見えなくてな、誰だ誰だと思つていううちにそいつはプールに入り込んで水浴びをし始めたんだ。

これは間違いなく溺れた生徒だ！ と俺がそう思った矢先に、その幽霊と思われるやつが、こう言つたんだ。

「 ああゝ、良い湯だなあゝ 」

と。

（……………）

「よく見たらよ、そいつは学校の教頭先生だったんだよ！まったく笑っちゃうよなあ！！」

……………。

僕はそんな話をしたやつ首筋をチョップし、一時的に脳に血が行き届かないようにして気絶させた。

「ちょッ！ルミナさんッ！何してるんですか！？」

「退場」

エロ哲を円から外し、部屋の端っこにアンティークドールのようにぐったりと座らせた。

「だいたい「良い湯だな」で、五月のプールだぞ？なんでやねん、とその教頭にツッコミをしたい。」

「それでは、次は余が話をしようではないかぞよ。とびっきりの恐ろしい話を」

そしてジャックマンは語り始める。ていつかやっぱり怪談話か！？

あれは、寝付きにくい夏の夜のことだぞよ。

真夜中にちよつと用をしに、トイレに行こうとしたんだぞよ。

なんじゃかそのとき、どういうわけかいつもと少し違うような違和感を感じたんだぞよ。

そのことに少し恐怖を抱きつつも、余はトイレにたどり着いて、

用をしようとしたとき、余は驚愕した！

(……………トイレに何かいたとか、そういう感じの怪談話か？これは。赤紙青紙とか、そんな感じの)

なんと、余は……余は……

フンドシをしていなかったんだぞよ。

(……………)

「どうりであのとき、下半身に違和感があったわけぞよ。フンドシをしていなかったから、やたらとスースーしてヘブフウッ!!」

「ちょッ！ルミナさんッ！また何してるんですかッ!!」

「退場」

気絶^ねかせた変態おやじを棺桶の上で寝かせる僕。

……………ていうか、もっとマシな話はないのか？このままではまたいつものバカなノリで終わってしまうよ。

残る話し手は赤ん坊……………じゃなかった、ジャンだけ。今までのこいつの行動上、前者二名と同じ末路を辿る可能性が高い。今の内に手首のスナップをきかせておかないとね。

「どうやら残るは我輩だけのようじゃのう」

「そのようだね、ジャン」

……考えてみたら、いつの間にか僕はジャンに敬語を使わなくなっているなあ。……まあいいや。本人も気にしていないようだし、日頃の行いが年上とは思えないものばかりだからね。

「ふつつふ……。我輩の話は怖いぞお？なにせ昔、お笑い大会で準優勝に輝いたくらいなんじゃからな」

早くも不安が倍増する。お笑い大会？今は怖い話をする場だぞ？前者二名と同じ末路を辿る気満々だよ、この人は。しかも『世にも奇妙な天烈な話』じゃなかったんかい！

「ま、黙って聞くが良い。面白さのあまりちびってしまうかも知れんがのう」

面白さのあまり！？

……ああ、もうダメだ。おバカロードまっしぐらだよ。

僕が手首のスナップを聞かせる練習をしているにもかかわらず、ジャンは語り始めた。

XXXX年、全人類は「なかれ教」と呼ばれる宗教に属していた。
(ジャン視点じゃないんだな……)

なかれ教とはどういうものなのか、それは文字通りに思ってもらえれば結構だ。

その宗教に入った者は、規律にちゃんと従わなければならない。

汝、他人を殺すことなかれ。

汝、他人に迷惑かけることなかれ。

汝、悪事をする事なかれ。

汝、他人を騙すことなかれ。

汝、他人を裏切ることなかれ。

・ ・ ・ ・ ・

汝、食べ物を食べる事なかれ。

汝、寝ることなかれ。

汝、歩くことなかれ。

汝、走ることなかれ。

汝、動くことなかれ。

汝、息をすることなかれ。

汝、心臓を動かすことなかれ。

汝、生きることなかれ。

規律を守るため、全人類は自殺し、世界には誰もいなくなった。
しかし、この規律はまだ続いている。

汝、死ぬことなかれ。

否定に否定を重ねると矛盾が生じてくる。
それが、「なかれ教」。

「
.....」
「
.....」

.....まあ、確かに奇妙奇天烈な話だったな。
って、この様子じゃオチ無しか？今回。

第15話 空を飛ぶ感じって、どんなだろうか

はじめに、前回のジャックマンは、あれからどうなったのかというところ

返事をしない。ただの屍しかばねのようだ……

そんなテロップが流れてもおかしくはないだろうとは思ってはいたのだが、どういうわけかジャックマンは前回の火あぶりの刑での火傷はしなかったのか、まったくの無傷だった。

それどころか性格も変わっていない。どうやらあのステッキは、ただの殺戮兵器だったようである。……いや、兵器を『ただの』というのは少しおかしいかもしれないけどね。

ともかく結論をいうなれば、あの謎ステッキはあの後ドラ もんの四次元ボット並の能力を持っている海パンの中に収納された。

……収納って、この場合おかしくないかな？

さて、それはともかくとして、今回の話へとそろそろ入ろうかな。

それは、僕が学校から自宅へと帰ったときのことだった。

「ただいまあゝ」

といいながら僕は我が家へと入り、そして今へと顔をひよいと覗かせると、そこには……

「ふおっふおお　　ッ！！仮面ラ　ダー・キイイ　クウッ！！」

とか言いながら居間でひとりで暴れ、戦隊ごっこをしている見た目は三十路のおっさん、頭脳は幼稚園児のジャックマンがいた。そしてそのおっさんの頭には何かしらの物体が乗っていた。

「あ、ルミナさん！」

名前を呼ばれて僕はおっさんからその声の主であるジャンヌへと振り向かせた。ジャンヌはどうやら先ほどから目の前のおっさんのひとり芝居を延々と見ていたみたい。……止めないの？

「いえ、一度止めたのですけど……」これからの時代、宇宙人の時代であるぞよッ！』て言つて……その……」

聞かなかったと。

ていうか、仮面ラ　ダーって宇宙人だったっけ？確か昆虫だった気もするけど……まあいいや。昆虫が人間化している時点で宇宙人と大差変わらないからね。

「　　おおッ！ルミナ殿ッ！帰っていたのですか！？」

ようやく知能レベル幼稚園児のおっさんが、僕の存在に気づいたようである。

……ていうか、僕はまず訊きたいことがある。

「……ジャックマン。頭に乗っているそれはなに？」

頭に乗っているもの……それは僕の目がおかしくなっていないければまぎれもなくズラだった。それもハゲヅラ。

そのハゲヅラには哀愁漂う波形の髪の毛が一本あり、「ああ、なるほど。髪の毛が波だからサ エさんのあのおっさんの名前は波平なのか」となんとなく思った。まったく今は関係ないけどね。

「なにつて、ヅラですぞ。……何ですか？最近の若者はヅラヘルムも知らないのですかな？」

いやいや。ズラのことは知ってたけどさ。

「そんなことより、何でそんなものを被ってるのさ」

地毛じゃないんだし。さては自分のおっさんキャラをさらに全開にしようという心構え？

「そんなことはありませんぞ。……フフフ、いいですか？ルミナ殿。これは一見、何の変哲もないただのハゲヅラに見えますね？」

そうとしか思えないよ。百人が百人そう言うだろうね。

ていうか、いつの間にかジャンヌの姿がないのですが、……さては逃げた？これから面倒ごとに巻き込まれると思って地震を予測したネズミのように逃げましたか？ジャンヌさん。

そりゃ、僕だって「嗚呼、これは絶対に面倒なことになるな」と

は思っているけど、主人公である僕がここから逃げ出したら話の筋がまったく通らないようになるから逃げていないのに、ヒロイン的存在である君が逃げ出してもいいの？

……そういえば前回、ジャンヌの出番がなかったなあ……。

「ああ、うん。見えるよ見える」

とりあえず話を進めようと僕は投げやり気味にそう言った。

するとジャックマンは「フッフッフッフウ」¹と笑い出し始める。……なに？その笑い？

「実はですな、このハゲヅラ、またの名を勇者のシンボルはただのハゲヅラではないのですぞ！」

そうと思ってるって。どうせ四次元ポット²の働きをしているその常時二十四時間穿いている海パンの中から取り出して、それでさつきまで遊んでいたんでしょうが。

まあ、どんな効果を持っているのかは知らないけどさ。

それとなに？その勇者のシンボルって……。

ハゲヅラが勇者のシンボルだったら勇者の人氣がた落ちだよ、絶対。ていうか勇者がかわいそうだね。

「実のこのハゲヅラの正式名称は『ハゲコプター』という、空を飛べるアイテムなのですぞッ！」

「へえ」

20へえ中1へえ。百円差し上げましょう。

でも前々回勝手に僕のお金使ってバクチして稼いだ分から学校に入学してきたからその分でチャラね。

「さあ、ルミナ殿ッ！このヅラを被^{かぶ}って大空の旅にでませんか？」
「いや、いい」

恥ずかしすぎるからね。

「そう言わずにッ！！ほらッ！この髪の毛一本が高速回転して空を飛べるようになっていのですぞッ！」

……それを聞いて決心したよ。絶対に被^かって使わない、とね。

「今なら使い終わったボ口^{そく}雑巾とかたっぱがなくなつた割り箸をつけて、お値段なんと十万円ですぞッ！一週間レンタルでは二十万円ッ……」

……よしッ！決めたッ！絶対に絶対の絶対であるくらいに被^かって使わない、とね。

それと、購入したほうが安いというのはどういうわけなんだろうね？

……はッ！まさかこのタケ プターならぬ『ハゲコプター』が四元ポケットよろしく海パンの中にまだ大量にあつて、在庫処分するためにレンタル料金を販売価格より吊り上げているのか！？

「さあッ！買いなされ、ルミナ殿ッ！！つーか買えッ！！卸値が五十万円もしたのでから十万円は安いとは思いませんか？」

売っている意味ね ！！

損してるだけジャンッ！！

てことはやっぱり在庫の処分に困^{こま}って販売価格をレンタル料金より下げているのか！？

……ていうか四次元って、いくら物を入れてもパンクすることは

ないんじゃない……？そういうところはツツコまないほうがいいのかな？

「悪いけど……そんなお金ないからパスね」

だが実際のところそのとおりなので、仕方がない。

一人暮らしでバイトもせず親からの仕送りだけでどうにか学生としての生活をしている僕にとって十万円は破格である。

イーやプレ テ3がほしいと思っているのに、その高さのあまりに買えていないわけだしね。

「……………！！！！！！！！」

僕が断るとジャックマンは「ガガガガア

ン！！」といった

た感じに口を開けて、呆然とする。

というか、もともと買う気もなかったわけだし、ここまでの展開は予測済みなので特に気にしない。

するとジャックマンは、

「……………そうですか。仕方ありませんね。ルミナ殿の財布の中身が海王星よりも寒いということは知っているのですが、どうせ無理だとは思っていたのですが……………まあ、物語の進行上、訊くしかないと思ったわけですよ……………チツ」

え！？なんですか！？「チツ」て！？

僕が少々戸惑っていると、

「いえいえ、気になさらずに。実はダソーで買ってきたごく平凡なハゲヅラをルミナ殿に十万円で売りつけようなんてことは、別に考えてなかったもので、気にすることではないですぞ」

.....あ、そゆこと？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2289b/>

ジャンク・ダルク

2010年10月10日07時08分発行